

七月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

怯、惰、卑

津 金 規 雄 神奈川

キリスト者ならねど涙して聴けりイエス受難のバツハの楽を
十字架を負ふその人の歩の運びヴィオラ・ダ・ガンバの弦は語るも
ソプラノの一員としてへみなとみらいホールに歌ふ君は教へ子
おのが身の怯を惰を卑を鞭打てる楽として聴く「マタイ受難曲」
若き日のおもかげ残すくちびるを出づる聖歌受難節近し

無用のゑくほ

小 嶋 一 郎 佐 賀

幸福度五十八位の国に住みいたたくビールしんそこ旨し
紺碧の空航く一機見送れば序でに気づく眼鏡のよこれ

向かひ家の老犬しきりに尾を振り一声吠えしのちのおもねり
老い妻が無用のゑくほ見せながら飯粒こぼすわれをば笑ふ
見収めと思へるとき夕映えに感傷をせり一意を込めて

二千六百人ほど

後 藤 美 子 北海道

陸別の最低気温今朝はプラス木々の枝先うるみて紅し
支部報の入稿せんと発寒川吹く風温きにつつまれて渡る
食事つくりゴミ捨て洗濯ものを干せりルーティンワークのさびしき充足
明治より令和まで五つの元号を生きむひと二千六百人ほどといふ
尖塔が焼け落ちゆくをありありと世界に見せて無残なりノートルダム大聖堂

琉球餅

藤 野 早 苗 福岡

真夏日となりたる四月の博多なり琉球餅のつばめを覚ます
焼きたての蜂楽饅頭白餡のマグマ流れて上顎を焼く
上顎を餡に焼かれて(蜂楽)は(炮烙)と知る蜂楽饅頭
子の齡とのわれが住みにし山口の湯田温泉駅無人駅なり
離郷者につめたくやがて暖かく中也にわれに吹けるこの風

☆

☆



高野 公彦 千葉

夜のうなばらひたひた進む波ありて波の行く手の令和の日本
大地震の年に生まれて大地震の年に逝きたる岩手の詩人
年寄りと見られた日は幾たびも水をくぐつた古ズボンはいく
会釈してすれちがひたる人は誰れ今ごろ彼も悩みてあらむ
いつか見し老いたる馬の澄む眼春の夕べの眼交にあり

水島 晴子 兵庫

仲 宗角 三重

咲き満てる房の馬酔木を双の手につめばはつか清まるごとし
杖突きて指しゆく方の十字路をよぎる人影みな障礙なし
下ばかり向いて歩けば舗装路の色が変はつて坂のぼりつむ
艶ふかきをとめの髪よその祖母の三つ編みなりし若き日が頭つ
天守閣まぢかに仰ぐ細みちに野の雛芥子のひらかむ四月

杜 沢 光一郎 埼玉

奥 村 晃 作* 東京

女といふ漢字に乳首の点ふたつありて老妻も立派なる母
笑ひもせず苦しみもせず泣きもせずいのち生かされ五年なる妻
腹部の孔から栄養物を注入する胃瘻法にいのち繋がれぬる妻
何を訪いても答へざる妻ほとんど何も見えてゐないでもいまも人間
脳梗塞で意識なき妻わづかなる呼吸と血流にていのち継ぎゆく

武 田 弘之 神奈川

森 重 香代子 山口

創刊を君と語りし支部報の「さらら」は続く君亡き今も
その墨字賜ひし支部報「さらら」なり見守りたまへ椋二先生
往年のトラック野郎きみの詠む十八首よし「さらら」巻頭
ふるさとの友の描きたる淡彩画見つつ楽しむ銀座画廊に
淡々とメタセコイアを描きたりこの樹は友の魂ならん

コリウスは紫蘇科の観葉植物で葉柄おもしろ彩美しき
雲塊のひまから一筋光射しモミジの山の一部明るくす
さざ波が立ちいるならん湖面を見下ろすわれに皺のごと見ゆ
全天が暗くなり来てその極み大粒の雨が落ち始めたり
十二月二十九日にかつてわれ屋根拭きをせりき屋根に上りて
曝ひし門の桜を伐りたれば空にぽつかり穴開きにけり
胴切りにしたる桜の断面に弥生の薄き陽があたりをり
庭桜伐る他はなきかなしみに逝ふなく逝きし夫を羨しぶ
甕に差す桜の幹に日は過ぎて花芽のみどり粒粒と噴く
庭端のなだりにあまた黄に点る八朔柑は挽ぎるすべなし



日影康子 富山

城址通りの櫨の新芽いつせいにほぐれてさやぎ春押し寄する
醬油つぎへ醬油充たしつつキッチンに明日の平安を露疑はず
散る前の桜にも一度逢ひたくて花冷えの風に吹かれつつ歩む
咲き満つる桜の土手に人力車止め車夫はスマホをしつつ客待つ
新元号「令和」の令に「召集令状」おもふは吾のみか改元迫る

古屋祥子 群馬

老人会サロンにて観る紙芝居、その原作を書けとぞ われに
「梶の木」と凶鑑は教ふ 葉に五裂、又は三裂の刻み深きを
オクラ、胡瓜に露滴るよ 穫れ過ぎと隣人が持ち来し東野菜より
玄関に数多待ち伏せしたる蚊も入りて山の美術館は蚊の音楽室
『莫言神髓』図書館返却延長を決めると読み始めたり

影山一男 千葉

同年の杉山隆よ君知らぬ時代を生きて五十年過ぐ
夜の地震過ぎてかそかに揺れみたりビールグラスのうすあをき影
青春の思ひはいまだ胸にあり羊齒の影置く柔土みれば
君の死を潜るがにわれ先生に目見えき七月の東京歌会
かなしみの象徴として燃えにけり安田講堂一九七〇年

狩野一男 東京

入り口の英子ざくらは無くなれど奥なる柵二桜壮健
先生の歌の頃よりうるさからず児童公園あそぶ子のこゑ
児童公園になる前そこらにはナントカ電建工場ありき
「児童小公園」の歌先生に九首ありますたのしい九首
三鷹台児童公園（平成）が残り十日となりてやすらか

宮里信輝 神奈川

智頭の義母見舞ひし賜物かへりには「瀬戸大橋」から四国ドライブ
前面硝子に事故死の虫の跡無数「投身」に似る音もありたり
「鶴林」を辞書でひき知る釈尊の入滅悼む意の「鶴林寺」
葉うらよりつばみを垂らす菩提樹の（不忠議）を仰ぐ「鶴林寺」にて
次の姉、長男、次男とわれ四人歩ませて首夏播磨「鶴林寺」

岡崎康行 新潟

下げられて揺るることなし干し物の重みの水がまだ滴らず
生き抜いてきたではないか戦中ををんなごとさらうじんたちで
花にある四の秩序を語りかくちんちやう四ひられんげう四ひら
ひと回りしてきましたと差し出さる手に盛られたる山の櫨の芽
あたらしき背広はないがよきクルマ車検代替車で知らぬ街行く

小島 ゆかり 東京

花冷えに覚めつつおもふ満月の夜に鯉食ふ男のはなし
春の雲かぜにながれて残りたる孤雲あり濃きしづけさに
ちりはてて幹くろくろと濡れてゐる桜にふかき肉声のあり
春ぞらへ遮断機あがり 行くごとく来るごとくいま歩き出すわれ
ゆふぐもはむらむら青しある家族、ありてなき家族さびし

木畑 紀子 京都

さくらさく野の遠景に青葱の束を積みゐる老農夫みゆ
斉唱のそめぬよしのの根方にてなつな、はなにらの微かなるこゑ
花傘をかかげ野鳥をよぶさくらその武骨なる黒幹を撫づ
野ずゑなる老健の窓とちられて万朶のさくら散りはじめたり
さくらばな咲きされば白みづの面に散りつくせば無 ただ風の音

島田 暉 神奈川

桜花白く群れ咲く夜明け方東の空に始電の音す
風のなく桜の花びら散りつげりわが一生もやがて消えゆく
ひいやりと桜の花の咲きつげり閉校になる広き校庭
桜花いまだ目覚めぬ夜明け方帰らぬ兵を送りし記憶
咲きさかる桜の花のそれぞれは若く逝きたる兵の顔々



大松 達知* 東京

ゆうぐれの青くて円いガスの火に手をかざしおり母がしていた
取り入って使われるわけでないだろうへまるつとがこの人に加わる
〈割り込み〉というボタンあるコピー機よ 割り込まれゆく人が押すなり
にんげんがねどうせにんげんが見るからね、直しておいて二重線引いて
傷ありて値引きされたるぐい呑みの、今宵も愛すそのひとつ傷

田宮 朋子 新潟

一、二輪さくら咲く朝春ぞらに呼ばれるごとく母みまかりき
子をもたぬわれに末期の母言ひきおまへのときは迎へてあげる
わが腕の中にて母のたましひはすすうと永遠の光に入りき
水雨ふる千鳥ヶ淵の桜花ちちははと見き二昔まへ
舞ひあがる朽葉のなかの瑠璃片が降り立ちて瑠璃蛺蝶となりぬ

小山 富紀子 京都

献杯とグラス上ぐればロゼワイン透かし遺愛のさくらがゆれぬ
さくらありしあたりへまたも目をやりぬ去年の風に倒れしさくら
廃校となりし母校にさくら散るあきらめるにはまだ時が要る
老桜樹老い木の意地や傾ぎつつ今年も京の一景となる
運命線切れしあたりにはなびらがのりてたまゆら多幸の相に

清水 正子 神奈川

時間の矢へし折るごとき大津波「三・一一」けふ八年目なり
三陸のスマホ画像にやさしけれ「風の電話」の白いボックス
電話線なけどころで話すから「風の電話」は遺族の慰さ
生命の循環の場なる陸と海せめぎあふとき無力なり人間は
ラジオから復興ソング「わせねでや」流れてけふは祈りのひと日



福士りか 青森

欠けやすきは人差し指の爪にして丹念にまるくやすりかけたたり
ささくれはささくれのまま放りおく小さき違和は痛みとならず
日本一の桜を今年は見にゆかず庭の草ひく 土の香がする
溶けかかるパニアイスのなめらかさ岩木嶺に春のひかりはさして
花曇る日曜の午後うとうとからだ眠らず骨折の父

風間博夫 千葉

とげぬき地蔵のわきの露店の七味屋の女主人わかみさんの声いつからがら
それぞれに七味並べて売る露店のおかみさんのほほ唐辛子色
一味づつ七味素早くすくひ終へ注文の重さ超えるはわづか
午後のニュース車がバンクさせられていますアナウンサーが告げたり
襟も袖も汚れてゐない作業服カルロス・ゴーンが着る作業服

田中愛子 埼玉

新元号のる号外をそにどりの青人草は奪ひ合ふなり
窓の外ときをり見たり春の日をケアマネージャーの話聞きつつ
愛らしき御名の朝比奈沙羅さんは柔道78キロ超級
命日にいちにち遅れたることを詫びつつ父にすいせん供ふ
花の水かへてゐる間にハシブトが供物の菓子さをさらひゆきたり

橘 芳 園 新潟

わが村に入りて大きく曲がる川水禍のたびに死者運び来し
ふるさとの中ノ口川疾き流れ村の幾人を死へおびきたり
入水せし檀徒の乙女と一度も語るなかりき喪の経を誦む
立ち泳ぎしつつ入りたる中ノ口川底なかのくちの水は死者のつめたさ
清濁を合はせ飲まずに澄む水を飲みて生きたし短かきこの世

水上比呂美 東京

田打ち桜、種時き桜と呼ばれたるこぶしの花がひらく三月
辛夷の木は日本原産、木蓮は中国原産しんせき同士
おぼろ夜にこぶしの花がひらきたりあそび女めの舌のやうな花びら
そば処のうらの大きなこぶしの木月夜に白き花びらこぼす
琉球の気泡グラスに浮かべれば白き花びらはつか身じろぐ

鈴木竹志 愛知

手入れせぬ庭にも春は心分に来たりて順に彩りを添ふ
佗助は四月になりても花咲かす暮れより咲きて三月を超えぬ
酒の会ふたつこなしてあとふたつ春は次々お声がかかる
新しき銘柄見つけ飲んでみる一白水成これは美酒なり
五黄土星さらに寅年このわれが美味しと飲めり一白水成

原賀環子 東京

花了へし葉つばきの枝を瓶びんにさし隠者のやうなわが雛まつり
ほろ酔はちりめんじやこの小鉢からきりまんじやろへ飛ぶ 夕ごはん
象遣ひが咲かせるならん咲きすぎて手なづけがたき桜一頭
みんなみに喜界島あり青き蝶アサギマダラを生む鳥といふ
拾遺することはなけれど念のため歌反故用のちりかご設く

水上 美季 東京

花びらを暗き川面にしらしらと落とし桜はひんやりと咲く
写真だとまつたく違ふ花になるわかつてゐるがまた撮る桜
特別なスタバができて目黒川沿ひは人人人ばかりなり
桜咲きこぼれ万代橋付近うすもいるのドームとなりぬ
スノードームの中にある人みたいなり君と静かに桜見てをり

大野 英子 福岡

この春はさくらを探し歩きたり父の忌にまだ咲かぬさくらを
あるき疲れ疲れた先の緑道にまぎれてソメイヨシノのひかり
その先に父は在ますか父の忌はさくらの奥をまた見てしまふ
遊歩道に枝さしのべる桜木がさあ踊らうとわたしを誘ふ
花びらが風にながれる行く先を示すがごとく別れのごとく

松尾 祥子 東京

混みあへる渋谷駅前交差点ひとりひとつの死を運びぬる
男の子に縁なきわれが男の子を始めて得たり還暦にして
紙おむつ開くすなはち放物線描き尿す^{ゆまり}二ヶ月の子が
いつせいに花咲くまひる竜の玉飾る小さき兜をえらぶ
九十の母が唄へばみどり子は春のうららのひだまりのなか



第二刷

高野公彦著 平成30年11月刊 各巻二八〇〇円(税別) 送料三〇〇円

明月記を読む

コスモス叢書第一一四八篇

短歌研究社

— 定家の歌とともに 上下

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼二二二二五〇六

奥村晃作歌集 平成31年2月刊 一四〇〇円(税別) 送料三〇〇円

八十一の春

コスモス叢書第一一五〇篇

(株)文芸社

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七一五一一六

第二刷

第34回詩歌文学館賞受賞 第17回前川佐美雄賞受賞

小島ゆかり歌集 平成30年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

六六魚

コスモス叢書第一一四三篇

本阿弥書店

著者住所 〒188-0001 東京都西東京市谷戸町二一八二七一九一四

古屋祥子歌集 平成30年11月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

地上根

コスモス叢書第一一四二篇

柘書房

著者住所 〒371-0116 群馬県前橋市富士見町原之郷一一二四